

郭沫若の『女神』創作期の逸詩文：作品の翻訳と解題

武, 継平
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5550>

出版情報：言語文化論究. 19, pp.193-218, 2004-01-31. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

郭沫若の『女神』創作期の逸詩文

——作品の翻訳と解題

武 継 平

はじめに

郭沫若の新詩の頂点ともいわれる処女詩集『女神』は「創造社叢書第一種」として1921年8月5日に上海泰東図書局によって出版された。新しく結成する在日中国人留学生の文学グループ「創造社」の最初の文学活動の一環でもあった。この詩集に収録された作品は「Venus」、「春愁」、「演奏会上」、「晨興」、「春之胎動」と「夕暮的婚筵」の6作品を除いて、すべて有力新聞『時事新報』の副刊である「学燈」学芸欄の外に、『少年中国』2-9(1921.3)、『新小説』2-1(1920.9)などのような定期刊行物や、郭沫若、田漢、宗白華三人の書簡集だった『三葉集』(1920.5,上海亜東図書局出版)などに個別に発表されたことがある。拙著『異文化のなかの郭沫若』(九州大学出版会2002)にある『女神』論も含めて、今までの『女神』に関するテキスト研究は初版『女神』にこだわっていた。様々な視点や角度から作品を分類し、それぞれパターン化することで『女神』創作時代の郭沫若の人間像を再現し、あるいは彼が代表する五四期新詩の主流の原始形態を把握しようとした。

しかし、郭沫若は1919年9月11日『時事新報』で新詩を発表し始めてから第二の詩集『星空』の収録作品が発表されるまでの間、つまり時期的に言えばまさに『女神』の創作期の最中だが、『黒潮』のような当時中日の問題で話題を呼んだ雑誌にも作品を断続的に発表していた。しかも同じ時期に『時事新報』に掲載された作品の一部はなぜか『女神』に収録されなかった。論文や文芸評論などはジャンルが遠うから入れられなかったのは無理もなからうが、収録されなかった新詩もかなりあった。それは単なる偶然の収録漏れなのか、それとも何かの都合上の考えがあったからなのか大変興味あることだと思う。もしこれらの逸詩文には『女神』のパターンや軌道を逸脱する傾向が見られるならば、当初意図的にはずされた可能性が濃厚になってくる。ならば我々は従来と異なる斬新な視点から『女神』の演出性について追究することができるのである。

これが今回それらの未収録作品を和訳する動機である。字数の制限で詩作品の一部を割愛せざるを得ないのが甚だ残念だが、さらなる研究の材料に値すると判断されたものには出来るだけの資料や解説を付け加えておいた。さらにこの時期に書かれた新詩以外のものから確実に郭沫若が執筆した初期の論文と文芸評論を一編ずつ翻訳の対象に選んだ。なお、各作品の分析および考察については今後の研究課題としたい。

翻訳資料の目次

同文同種を論ず（論文）	1919.10.10	上海『黒潮』1-2
生命の文学（文芸評論）	1920.2.23	上海『時事新報・学燈』
ぼくの散文詩（散文詩）	1920.12.20	上海『時事新報・学燈』
二組の少年少女（詩）	1919.10.18	上海『時事新報・学燈』
夜明け（戯曲）	1919.11.14	上海『時事新報・学燈』
フンダリカ（白蓮華）（詩文）	1920.2.5	上海『時事新報・学燈』

同文同種を論ず

解題：

初出掲載誌は1919年10月発行の『黒潮』第1巻第2期である。五四期の中日関係を意識していた総合月刊誌として誌名はよく知っているが、実物を見たことがない。上海図書館しか所蔵していないらしい。わたくしの知っている限りでは、上海図書館が『郭沫若著訳書目』（上海文芸出版社1989年10月刊行）を編集出版して以来、稀覯本として特別保管されているこの雑誌は一般人の閲覧はできない。今回翻訳に使用したのは同館所蔵の『黒潮』を使って編集されたという『郭沫若佚文集』（王錦厚・伍加倫・肖斌如共編、1988年11月四川大学出版社）に収録されたものである。一言断っておきたい。

1919年五四運動後の7月、九州帝国大学医学部在学中の郭沫若はリーダーとして同学部にいる数人の中国人留学生と「夏社」という小さな留学生愛国団体を結成した。『創造十年』によれば、「目的は抗日であって、もっぱら日本の各種の新聞雑誌に出ている中国侵略の言論と資料を蒐集し、それを中国語に訳して国内の学校、新聞社に送付しようとするのである」。当時「夏社」の同人たちが中国国内の公刊誌に発表したものは今のところ、「日貨の排斥について」と「同文同種を論ず」の2編しか発見されていない。署名「夏社」の前者も郭沫若の書いた創作文として『郭沫若佚文集』に収録されているが、今回の和訳は「郭開貞」の署名論文である「同文同種を論ず」を選ぶことにした。

もし周作人、錢稻孫を親日派、そして魯迅、陶晶孫などのことを知日派といえることができるなら、郭沫若を始めとする創造社の連中は知日＋反日派と言えなくもないだろう。もともとわたくしはこれらの作家を「XX日派」に帰属させる分類法にはあまり賛成しない。しかし、気になることはないわけでもない。例えば、郭沫若は、特高科と外事警察の二重監視を受けていた亡命時はともかく、国費留学を終えて医学士卒業で帰国する際、なぜか十年間身を寄せていた日本を「新式の文明牢獄」と罵倒し、十年間の勉強を終えて卒業したことを「十年の有期懲役が終わった」と詩集『前茅』に書いている。ひしひしと伝わってくる日本に対する敵意は周氏兄弟を含む他の中国人留学生たちと何かが違うように感じさせられる。六高を卒業する前には、両親宛てた手紙（『桜花書簡』p121）に日本のことについて、「科学の面においては非常に進歩している。ここ数年来いよいよ欧米諸国と肩を並べる勢いを見せている。国は無用な人材はなく、人はみな職務に尽力している。わ

が国が平素からちびどもと見なして相手にすることを恥じていた彼らは、まさに燃え盛る炎のようだ」と感心していた。しかし九州帝国大学に入学してから 1919 年 5 月 4 日に全世界を震撼させた五四運動が興り、山東半島問題を通して中国に対する日本の野心がより明らかになった。福岡に来て半年しか経っていない 1919 年の初夏に書かれたこの「同文同種を論ず」がまさに郭沫若の日本観および日本人観の急激な転換を示すものである。言ってみれば、郭沫若の敵意は日本に対するというより、日本人という人種集団に対するものだったと見受けられる。しかもその敵意は自分の生活の不遇や不満から生まれたものではなく、それよりもっと文化的、ナショナリズム的なものだった。というわけで、わたくしはこの論文が郭沫若の日本観あるいは日本人観を理解するための好材料だというふうに位置付けたいと思う。

翻訳するに当たって、次のような技術的な処理を行った。

原作にある列挙記号は全部 (一) (二) (三) だった。混乱しやすいので訳出時に区別をつけた。原文にある「乾☰」「震☳」「坤☷」「兌☱」という八卦文字の表記には誤記があるので、それを訂正した。

(本文)

- | |
|----------------|
| 一、序論 |
| 二、中日両国の言語文字の異同 |
| 三、日本人の漢字廃棄運動 |
| 四、中華民族の由来 |
| 五、日本民族についての研究 |
| 六、結論 |

一、序論

この頃日中親善を唱える論者は必ず両国の同文同種を前提とする。英米は同文同種であってもアメリカ合衆国の独立戦争があった。英日は異文異種だが、日英同盟が締結されている。同文同種かどうかはともかく、それは必ずしも親善の前提にはならないのである。ところで、わが中国と日本とは本当に同文でまた同種だろうか。

同文同種論の根拠は次の二種類にほかならない：

- (一) 日本人は漢字を使用すること。
- (二) 日本人は膚の色が黄色を帯びていること。

これのみである。もしこのような皮相の見解を以って中日両国が同文で、しかも同種だと断言することができるなら、ハンガリー人とオーストリア人もまた同文同種で、インド人とサンスクリットを使う中日両国の僧侶もまた同文同種とも言えるではないか。いかにせんその違いは何だろうか。日中同文同種論はまさに我々に限りなき研究の余地を与えてくれた。我輩は一切の因襲や陳腐な考えを切り捨て、中日両国の言語文字および人種系統の異同を研究した上で判断を下さらなければならない。

二、中日両国の言語文字の異同

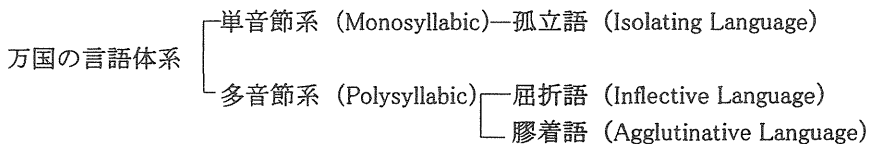
中日の言語文字の異同については、少し日本語を習ったものなら皆知っている。わたくしは今閲覧の便を図るために発音、造語、文法および文体の四つの種類に分けて論ずることにしよう。

(一) 発音 日本語の発音は最も簡単である。ローマ字で表示する時、母音は五個、子音は十六個、複合子音は四個、単音複合音は合わせて七十一個ある。次の表に示しておく。

	A	I	U	E	O
K	KA	KI	KU	KE	KO
G	GA	GI	GU	GE	GO
S (SHI)	SA	SHI	SU	SE	SO
Z (J)	ZA	JI	ZU	ZE	ZO
T (CH) (TS)	TA	CHI	TSU	TE	TO
D (J) (DS)	DA	JI	DSU	DE	DO
N	NA	NI	NU	NE	NO
H (F)	HA	HI	FU	HE	HO
B	BA	BI	BU	BE	BO
P	PA	PI	PU	PE	PO
M	MA	MI	MU	ME	MO
Y	YA	I	YU	E	YO
R	RA	RI	RU	RE	RO
W	WA	WI	U	WE	WO

中国語の発音は a、i、u、e、o の外にさらに ü という音がある。また二重母音には ai、ao、ia、iu、ie、io、ua、ui、uo、ei、ou、ue、üe があり、三重母音には iao、uai、uei があるので、単、複母音は合計二十二個ある。さらに「上平」、「下平」、「上」、「去」、「入」の五つの音便をかけると単音の数はすでに百十個にのぼる。そのほか、子音と母音を結合させた発音もあるが、一々論ずるまでもなからう¹⁾。

(二) 造語 日本語は純粋な表音文字で、中国語は表音のみに限らない。専ら音節を論ずるならば、世界各国の文字と発音の構造は次の表のとおりである。



孤立語というのは、一字一音で、互いに独立しているもので、中国語がそうである。屈

折語というのは、数音一字の時音節同士がつながっている。インド、ゲルマン言語系がそうである。膠着語というのは、数音一字の時音節同士はつながらない。日本語がそうである²。

(三) 文法 以下では最も著しく異なるものを羅列しているの、その他は逐一引用しない。

A, 日本語の格というものには日本語が一定の象徴性を有することを表す(てにおは)。

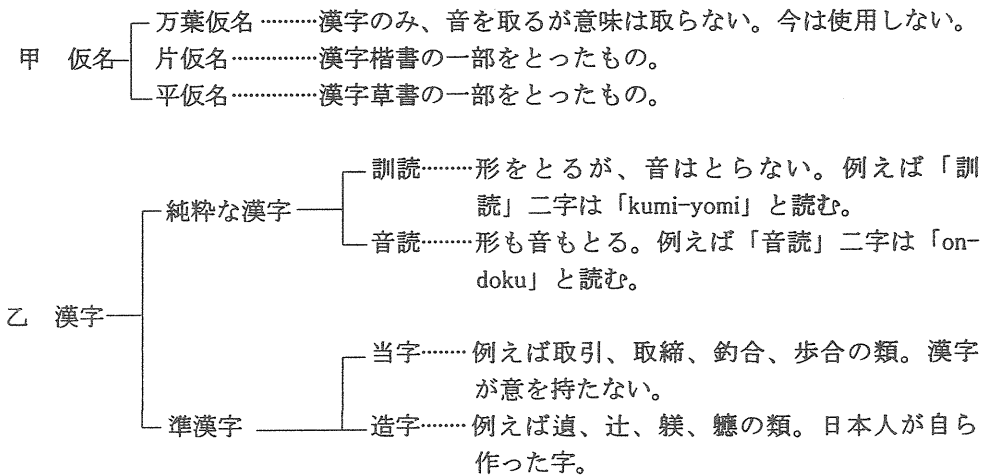
中国語には該当のものはない。

B, 日本語の形容詞、動詞および副詞などは語尾の変化がある。中国語にはない。

C, 目的格や補語などの動詞との配置においては、中国語と日本語は逆である。

D, 中国語には前置詞がある。日本語にはない。それに当たるようなものは全部後ろに置く。

(四) 文体 日本にも漢字だけを使って作詩作文をする人がいる。しかしいずれも訓読式で上下逆さまにする。しかもそれは純粋な日本語の発音、方言、文法などにしたがって読み、その共通文体とは一種の変わった別の様式にすぎない。その普通の文体とは仮名と漢字を組み合わせたものである。



勝手に造られた漢字に関しては、「当て字」と仮名などは漢字の形から生まれ変わってきたものだが、まったく違い発音なのでもはや漢字ではない。訓読は漢字の形しかとらず、音読は音形両方をとるが、発音は皆唐宋時代の死音で、今の発音ではない。しからば中日両国では同文といわれるものはただこの髑髏のような漢字にすぎない。しかしこのような形しか残っていない空っぽの髑髏であっても、近代の日本人はそれを廃棄する運動を展開させようと余力を惜しまないのである。

三、日本人の漢字廃棄運動

世界万国の中で、日本ほど文字が無条理で、しかも形態美が無く、なお独立性のない国はない。試しに日本の新聞の一面を読んでみると、漢字と仮名は雑駁さを呈している。漢字に訓を施し、あるいは音を与え、仮名は平仮名を使ったり片仮名を使ったりする。文体は時には漢文、時には欧文の直訳である。変わった形が多々あるので、珍しくはない。言語文字の繁雑さは国力の発展にしろ、人文の進歩にしろ甚だ大きな障害であろう。日本人は早くもその煩わしさに気づいてはいたが、漢字を採用したせいにしている。それで漢字を廃棄する運動が今盛んに行われている。

日本人が漢字を廃棄すべきだと論ずる理由はいくつかある。

- (1) 漢字は原始時代の産物で、近代文明には相応しくない。
- (2) 使用範囲はアジアの一部に限られているため、世界の大勢とは無関係だ。
- (3) 字数が多すぎるわりに役に立たない。
- (4) 字形が複雑でしかも覚えにくい。
- (5) 同音異義、異音同義、または一字数義のものが多すぎる。
- (6) 日本の表音文字とうまく調和しない。

この外に、行政上、教育上、外交上、そして社会においても多々ある障害を生じるといふことも言われているが、枚挙にいとまがない。日本人の論が公正かどうかはここでは具体的に論じないことにする。とにかく、近代の日本人は心の中で漢字をこの上ない苦痛な桎梏と見なさないものはいない。そしてそれを一挙に廃棄しようとしている。今日に至ってまだ漢字を援用しているのは、殊に一部の保守派の固執と野心家の利用があるからであって、そして漢字に取って代わるものがいまだ完備していないだけなのである。

保守派の中では、ごく一部時の要務を認識せず漢字とシナバマロトモの漢学者たちを除いて、現状維持を主張する理由は漢字の廃棄がそう簡単にできないと思っているにすぎない。千年前に日本人は漢字を導入した。習慣は第二の天性となる。日本人の中には漢字が中国の文字だということすら知らない人はどれぐらいいるか知らない。留学生が漢字を書いているのを見て「支那人もまた漢字が書けるのか」とびっくり仰天するのも漢字に同化された（日本人から見れば漢字が日本人によって征服された）からだ。もしいつか漢字を廃棄することとなると、

- 1) 造られた新符号では完全に漢字に代えられない。
- 2) たとい完全に代えられたとしても、数千年来の国史国文は忽ち悉くご破算になる。
- 3) たといこのようご破算が惜しくなくても、代用する新符号の普及および熟練は今日の漢字のようになるまで少なくとも二、三十年はかかる。
- 4) 日本の国力、人文は二、三十年の挫折を免れない。

以上は保守派の主張だが、野心家たちの主張は次の通りである。

I 漢字は同文同種論のお守りだ。廃棄したら東アジアをものにする事ができない（原文は「門羅東亜」）。

II 漢字の廃棄によって対支貿易は痛手を受けることとなる。

III 台湾、朝鮮など新しい附属民の支配においては様々な困難が生じる。

野心家たちの主張は大体以上の通りである。漢字を廃棄する根本的な意義においてははい

ずれも積極的な抵抗がない。今日日本人は当用漢字の使用数を減らそうとしている（現在では六千字しかない）。一方、それに代るものの完備を図り、新しい文字の普及と熟練のために漸進主義の道を辿ろうとする。野心家たちのプロジェクトが早く円満に実現しても或いは破棄されても、いずれ勝利の栄冠は漢字廃棄派のものとなる。

漢字廃棄派は漢字に取って代わるものの研究をしてきた。その主張の一部はすでに採用された。例えば次のようなものがある。

ア 仮名のみ使用する説。主張者は数少ないが、最も古い。

イ エスペラントを採用する説。主張者は一番少ない。反対者は極めて多い。

ウ 新符号を新たに創る説。主張者は数少ない。しかも出された案も不一致だ。

エ ローマ字を採用する説。主張者最も多数だ。近來ローマ字の雑誌、字典、詩文集などのような出版物は種類が多い。思うに、二、三十年後、日本人の「ローマ字帝国」の夢は公然としてこの二十世紀の世界で実現できるだろう。

四、中華民族の由来

以上は中日両国の言語文字に関する粗雑な論断である。次に我々の視線を種族の問題に移そう。

わが国には古来盤古による天地開闢の伝説がある。これは後世の思想家が建てた空中樓閣である。黄帝の時代は北伐南征して当時の先住民を方々追い払って版図の拡大をしていた。わが中華民族の先祖が決してもともと中州にいたわけではないことが分かる³。

わが中華民族の先祖が最初から中州にいたわけでないならば、いったい何時そしてどこから移動してきたのか。この問題に対して泰西の学者たちが出した答えは憶測が多く、いずれも確証がない。なかんずくわたくしが最も信じてよいと思うのはラクーペリ (Terrien de Lacouperie) というフランス人の学説である⁴。ラ氏はわが中華民族の先祖が黄帝の時代からカスピ海の南岸より移動してきたと主張する。根拠としてわが国の言語文字、思想、宗教信仰、社会組織などは、古代カスピ海南岸諸国と極めて類似している点が挙げられた。

a. 中国の文字はバビロンの楔形文字に似ている。(cuneiformis)

b. 医薬占星諸術はアッカド文化と同じである。(Akkad)

c. 『尚書』にある神の六宗の信仰はスシアナ国 (Susiana) の一人の至上神、六人の次上神の信仰と同じである。

d. 十二州牧の制度もまたスシアナ国と同じである。

故にラクーペリ氏は中華民族の先祖がカスピ海南岸から来たのだと強く主張した。反対派も少なくないが、結局立証できる反論はないのでやはりこのラクーペリ説は失墜しにくいと思った。時代に関しては、わたくしは黄帝の時代からではなく、伏羲以前とすべきだと考えている。

(A) 『易伝』:「伏羲氏は仰いでは象を天に觀, 俯しては法を地に觀, ……ここにおいて始めて八卦を作り, もって神明の徳を通じ, もって万物の情を類す。」「情を類す」というのは言語のことで、象形のことだ。『易乾鑿度』では、「乾」を以って「天」とし、

「坤」を以って「地」とす。また「巽」は古代では「風」、「艮」は「山」、「坎」は「水」、「離」は「火」、「震」は「雷」、「兌」は「澤」という字であった。実は八卦の卦象こそわが中華の最古の象形文字だ。わたくしはその象法の趣旨を踏まえて次のように推論して見る。

先住民たちは大陸に生まれた時、仰げば空は果てしなく広がり、見下ろせば大地は茫々として黄河によって二つに分断されている。故に伏羲氏は一本の線を引いて天を象徴させ、それを二本にして地を象徴させた。三本の線を重ねて卦とした。「乾」は天の高さを示し、天空の縦断面であり、「坤」は地の広さを示し、黄河流域の平面図である。乾と坤で卦となる。わたくしの卦は即ちここから演繹してきたものである。

- 乾☰
 - 離☲……………稲妻の形に似ている。稲妻が空で生じ、天は分裂して火が起こる。故に「離」は「火」となる。
 - 震☳……………稲妻の一番に似ている。天の上の層が分裂して雷が聞こえてくる。故に「震」は「雷」となる。
 - 巽☴……………旋風の形に似ている。風が立ち砂を巻いて柱となる。天の下の層は断裂する。故に「巽」は「風」となる。
- 坤☷
 - 艮☶……………山の形に似ている。地は突起して天に接す。故に「艮」は「山」となる。
 - 坎☵……………川の形に似ている。兩岸は水を挟み、水の中には天がある。故に「坎」は「水」となる。
 - 兌☱……………海の形に似ている。彼岸のない川で、水天接し、広々として果てしがない。海は澤の元だ。故に「兌」は「澤」となる。

倉頡という人が象形文字を造って以来、文字の形も音も皆変わった。「乾坎艮震」は形を表示し、「天水山雷」は音を表わす。その形が変わったがまだ想像がつくものは「乾天坎水」の類である。『説文』も一画を以って天を表わす。「水」は即ち「坎」卦の縦書きにすぎない。

八卦文字の説は大体上述の如し。なかんずく☷の一字は、わが国の上古の歴史上大変意義あるものだと思う。所謂「法を地に觀」て八卦が成り立つというが、伏羲氏はもし黄河流域の地形を実際に見ていなければこの卦象が決して成り立つはずがない。

(B) 古来太昊伏羲氏の母が華胥の渚に居て成紀で帝を生んだと言い伝えられている。漢の文献ではそこが天水郡に属する。華胥の渚というのは、カスピ海の音訳ではないかと思われる。カスピ海のことを欧文では「Kaspi」という。「華」という字の日本語読みは「Kwa」または「Ka」だったので、唐音そのものだ。唐の人による梵語の訳名を考察すれば、「華」という字の古代の発音に「K」が含まれていたことを十分証明できるものが下記のものである。

- ① 芬陀利華 (Pundarika) …………… 白蓮花。
- ② 摩訶曼殊沙華 (Mohamayusaka) …………… 大きな青い花、五天華の一つ。
- ③ 曼殊沙華 (Mayusaka) …………… マンジュシャゲ。

- ④ 華手経 (Kusalamula) (Paridhara) …… 諸善根経から。
 ⑤ 華氏城 (Kusmapira) …………… パータリプトラ宮殿。
 ⑥ 華鬘 (Kusmamala) …………… 仏殿の内陣を荘厳（しようごん）する仏具。

(C) 『列子・黄帝篇』: 「夢に華胥氏の國に遊ぶ。華胥氏の國はえん州の西、台州の北に在り、齊國（中国一原注）に斯くこと幾千萬里なるを知らず」。

この華胥氏の国というのはおよそカスピ海の海岸にあるわが中華民族の先祖の古里故郷ではないか。胡馬は北風に嘶き、越鳥は南枝に巢く。寒帯や赤道の人、温帯に旅して故郷を懐かしまぬものはいない。黄帝の時、東に大移動して久しからず、年寄りの言伝えを聞く。思うに、故郷遙々遠方にありて慕うべけれどもそれに及ばず。故に魂の遊に託して想像する。これは東への大移動が黄帝の時代からではなかったことを十分証明することができる。

したがって、我々は敢えてラクペリ氏の説に対して微かな修正を行う。つまり、わが中華民族は伏羲氏以前にすでにカスピ海の南岸から東にある中国に引越してきたのである。

五、日本民族についての研究

日本民族は種々雑多な混血人種である。多数の歴史学者、人種学者の見解を踏まえて、その血統の成分を次のように分けてみた。

原住民	……	蝦夷	……	20%		
外来人種	—	黄色人種	—	漢族人種	……	10%
			—	ツングース族	……	10%
			—	褐色人種	……	マレー人種

(i) 蝦夷 有史以前の日本民族で、外来者によって追い出され、現在は北海道、千島などに退いて住んでいる。言語風習は異なるので日本人に化外と見なされ平等な待遇を受けていない。故にこの民族はいまだに開化していない。その先祖の由来に関しては、一体島国の土着かそれとも外来者か未だにそこまで論及する人はいない。最近日本の鳥井龍蔵氏は蝦夷語とパルチア語との間には類似点があると指摘している 5。例えば：

	わたし	發明	頭	空	挨拶
パルチア語：	(Ani)	(Bara)	(Risū)	(Sami)	(Sarum)
蝦夷語：	(Kani)	(Kara)	(Ri)	(nisami)	(Saianpa)

だとすると、土着の蝦夷人はもしかして黄色人種の先着者だったかもしれない。

(ii) 漢族人種 わが国の人々が日本に入ってきたことについて歴史上明らかに証明されたのは秦の徐福である。日本人山路愛山氏は日本が即ち中国古代の所謂「東海姫氏の国」で、日本人の刺青の風習も古代の呉越の人と同じだ。日本人の血管の中に

太白と仲雍の血が流れていると云々指摘している 6。でも古代の呉越の人が日本に来たのは一体太白が呉の国に来る前なのかその後なのか、到底考証することができない。

(iii) ツングース族 朝鮮、満州、モンゴル人などは皆ツングース族だった。日本語にはウラル・アルタイ語との共通点がある。日本という島の北西部と朝鮮の南端との間には一海峡の隔たりしかない。ツングース人が古くから海に渡って日本に渡来できたのも何の不思議もない。日本人歴史学者や人種学者は、有史以前の日本本島北西部にある出雲地方の出雲人がツングース人の末裔だと考えている。

(iv) マレー人種 古代蚩尤が現われた後わが国の先祖たちに追われて南下を余儀なくされたものではないかと思われる 7。土着先住民の言伝えでは大体その先祖が北から南下したというのが、彼らはその証明だ。日本人とマレー人との類似点は極めて多い。

1. 日本語とマレー語とは共通点をもつ。
2. 日本人の刺青の風習とマレー人（インドネシア人）と同じだ。
3. マレー人は檳榔を噛むのが好きで故に歯が黒くて唇が赤い。日本人も唇を赤く塗り、歯黒にする風習がある。先祖の習慣の名残が尚残っている。
4. 日本人は祖父と孫、または親子襲名の風習があるが、マレー人と同じだ。
5. マレー人はカヌーで人や物を運ぶ。日本人も持っている。
6. 日本人は下着のパンツをはかない。男は布で下半身を巻き、女は布で腰を巻く。その風習はマレー人と同じだ。
7. マレー人は果物を頼りにして暮らす。日本人の食事は植物性食物を沢山取るのもその遺伝だ。
8. 果物の中に糖分が多く含まれる。日本人が砂糖を好むのもその名残だ。
9. マレー人は木を建てて住まいとする。壁も柱も用いない。日本の「堀立小屋」と同じだ。
10. 日本では正月を迎える時玄関の上にはしめ縄を掛け、玄関前には松竹を飾る。マレー人も同じ習慣だ。

日本人とマレー人との類似点がこれだけあれば、日本人の中でマレー人種が占める割合が最も多いことの証しになるのみならず、同時にまた漢族人種とツングース族が最も少ないことの反証にもなる。なぜなら、第一、漢族人種が優勢を占めるなら日本人はとっくに同化されたはずだ。今日のように両国の言語風習においてなお雲泥の差があるはずがないと思われる。第二、ツングース族が優勢を占めるなら日本人はある程度北方民族の気質を持っているはずで、衣食住の三大要素においてその先祖の気質がまったく残っていないはずがない。北方の地は寒い。北方人は防寒具の用意がかならず周到だからかならず毛皮を着、肉やチーズを食し（動物性食物はカロリーを多量に含む）、暖かいところに住む（例えば北方人はオンドル寝台を使い、朝鮮人はオンドル床などを使う）が、衣食住において日本人はまったく正反対である。

日本人の自慢する万世一系の皇族は外来人種のマレー人種である。

- Ⓐ 日本の神話では、皇族の先祖を天照大神が高天原に住み、孫にあたるニニギノミコトに瑞穂の国に行くよう命じたということだが、これ即ち天孫の降臨だ。瑞穂の国というのは日本の古い名前だった。天孫降臨説も海を渡って来航したこ

とを神話化されたものに過ぎない。

⑧ 始めて着くところは例えば九州の大和と伊勢の紀伊など、いずれも日本の南の海岸だった。

⑨ 日本人西村真次によれば、『古事記』（日本最古の書籍）の中の「無目堅間の小舟」、また『日本書紀』の中の「無目籠」というものは継目のない籠舟だ。今安南地方では尚現存している籠舟がある⁸。土着民は竹で籠を編み、形は鶏卵のようなもので、椰子油や牛糞を塗って水に浮かせて舟とするということである。故にわたくしは日本の皇族が外来人種、しかも外来人種の中のマレー人種だと指摘したわけである。

日本人の中にも自分たちがマレー人の子孫だと思わない人、そして皇族がマレー人種だということを甚だしく忌み嫌っている人もいる。彼らが思うには、日本人は当世の文明人種である。もしマレー人種が日本人にこのような密接な関係があるとすれば、なぜマレー人種はいまだに開化しないのか。彼らはマレー人と日本人との分化には二つの原因があることを知らない。その一、地勢の関係；その二、混血の関係。マレー人は熱帯に安住し、働かずに食い、勤めずに服を得ることができるとして文明開化を促す機械もない。対して温帯に移動してきたマレー人は環境の変化によって変わり、長年を経て次第に開化してきた。さらに彼らは漢族人種やツングース人種とも融合し、血を混合することで文明を吸収して今日の、元マレー人で今はマレー人ならざる日本人種になったのである。雑種が優勢だ。これは生物学者たち共通の認識だ。日本人の出藍の誉れは天の賜りものである。今日の南洋を見れば分かるが、だいたい中国人とマレー人の混血児の子孫は非常に優秀である。これは正に日本民族が辿った進化の歴史の縮図だとわたくしは思う。

満蒙を併呑し、そして朝鮮を同化させようとする日本の野心家たちは日本の皇族がツングース人種だと極力主張している。苦心惨憺して様々な口実を網羅して根拠にしようとする。これは自らを欺き、人を欺くことであって、無駄な努力だ。確かに日本民族の血の中にツングース人種の血が残っているだろう。これに我々も反対しない。日本の歴史学者のいう出雲族というのは即ち南下したツングース人だった。これは我々も認める。しかし日本史の記述によれば、日本の皇族が日本にやってきたのは出雲族の後だったということである。出雲族と日本の皇族とは断じて同一の概念に混同しがたい。

日本の皇族が徐福の子孫だと思っている人はわが国にもかなりいる。この点に関しても我々は申し開きをせざるをえない。第一、徐福が渡海したのは二千年前のことだった。しかし日本の歴史学者の推論によれば、日本の皇族が日本に渡ったのは三千年前のことであつた。時代がまず合わない。第二、もし漢族人種が嘗て日本全国を支配していたならば、日本はとっくの昔に文明開化されていたはずで、唐の時代になってから漢の制度を導入しはじめたというのはおかしい。第三、日本の皇族は姓がない。わが国は有史以来このような先例はない。このような様々な納得のいかない問題があるからには、徐福の子孫と日本の皇族との両者をやはり断じて混同しがたい。

要するに、日本民族は即ち黄褐二色混合人種であって、なかんずく褐色人種の成分が多い故にその粗野な風習が今日に至っても尚まだ純化していない。そして日本の皇族の先祖は間違いなく純粋なマレー人種だった。

六、結論

以上の論述をまとめて、我々は一つの極めて単純な結論を得ることができた。つまり、中日両国は同文同種ではない。仁徳や正義を国是とするならば、たとい異文異種であっても、仲良くなれないことはないのである。もし私利や霸道を国是とするならば、たとい黄帝の子孫袁洪憲のことであっても、わが国の人々は必ず太鼓を叩いて攻撃する。同文と云わんや！同種と云わんや！

(初出 1919 年 10 月上海『黒潮』月刊第 1 巻第 2 期)

訳注

1. 作者が同じ発音の「ui」と「uei」を別物にした上に、また「ua」を二個並べるような単純なミスを犯している。ちなみに、今の中国語の単、複母音は全部で 19 個しかない。「io」という発音は四川方言にはよくあるが、標準語にはめったにない。
2. 原文にある「孤立語」「屈折語」「膠着語」の横文字表記は「Lsolating」「Reflective」「Aggregative」となっている。どれも間違いか不十分だったので、逐一訂正し、言語学専門用語に直した。
3. 「中州」というのは古代中国の呼び方である。現在の河南省一帯のことをさす。また「中原」ともいう。
4. 原作にあるラクペリの英文表記は誤記である。一応調べてそれを訂正した。
5. パルチア語のことを中国語では「安息語」という。つまり、安息国の言葉。安息国とはアルサケス朝パルチア王国のことで、中国ではアルシャーク Arshak (アルサケス Arsaces) を音訳した「安息」の名で知られる。
6. 『史記』卷 31「呉太伯世家」にはこう記述してある。「呉太伯、太伯弟仲雍、皆周太王之子、而王季歴之兄也。季歴賢、而有聖子昌、太王欲立季歴以及昌。於是太伯仲雍二人乃奔荊蠻、文身斷髮、示不可用、以避季歴。季歴果立、是為王季、而昌為文王。太伯之奔荊蠻、自號句呉。」大意を訳すところなる。「呉の太伯・太伯の弟仲雍は皆周の太王の子にして王季歴の兄也。季歴は賢にして聖子昌有り。太王、季歴を立て、以って昌に及(およ)ぼさんと欲す。是に於て太伯・仲雍の二人は乃ち荊蠻に奔り文身斷髮し、用うべからざるを示し、以って季歴を避く。季歴果たして立ち、是を王季と為し、昌を文王と為す。太伯の荊蠻に奔るや、自ら句呉と號す。」
7. 蚩尤とは中国の苗族の英雄神、炎帝神農氏の子孫で、銅の頭、鉄の額、人の体と牛の蹄、目が 4 個、手が 6 本、という姿をしていた。石や砂を食物にしていた。戦争がうまく、戦えば必ず勝ったので、軍神として知られていた。
8. 安南地方とは Annam インドシナ半島の東岸地方のこと。
9. 袁洪憲とは袁世凱のこと。

生命の文学

解題：

郭沫若は1919年9月11日から『時事新報』の文芸欄「学燈」で新体詩を発表しはじめた。自分の書いた詩が活字となって数多くの人々に読まれることは彼に喜びと刺激を与えてくれた。まもなく彼は第一次詩歌創作のピークを迎え、胸中に溜まっていた詩情のマグマを一気に噴出させた。『創造十年』によると、この時期の彼は精神状態が極めて不安定で、詩を創るというより次から次へと噴出する何かを書きとめざるを得ない毎日だった。重度の難聴を患っていた彼は時々福岡市図書館閲覧室の片隅にしゃがみこみ、一人で涙を流しながらタゴールの詩を読み耽っていた。台風が猛威を振るっている真最中でも一人で博多湾の怒涛を見たりしていた。ある意味ではその時彼は自制できない精神状態に陥っていた。こんな時、彼にはプロの文学者になる意識は当然なかったはずである。なにもかも感情の噴出に任せていた。当時友人宛の書簡などを見ると、この時期の彼は何よりも自分の直感を信じる天才論者だった。

ここに紹介する「生命の文学」は医学生だった郭沫若がはじめて書いた文芸評論である。まさにこのような作者の思想の反映であろう。『時事新報・学燈』に発表したのだから、いつも詩を読んでくれる読者に自分の文芸観を披露する意思があっただろう。叡智の光を感じるところは少なくないが、幼稚で分かりにくい表現も目に飛びつく。とにかく文学とは何かということを真剣に考えて自分の言葉で表現されたものである。その観点の一部は1920年5月出版された『三葉集』にも見られる。

(本文)

生命と文学はまるで違う二つのものではない。生命は文学の本質であり、文学は生命の反映である。生命なしでは文学はない。

人間の生命の中で最も高級な成分は精神作用である。精神作用は脳作用の総合にすぎない。脳作用の本質はEnergyの交流にすぎない。

すべての物質にはみな生命がある。無機物にも生命がある。すべての生命はみなEnergyの交流だ。宇宙全体はEnergyの交流にすぎない。

物質とEnergyは一元にすぎず、二つのものではない。物質なしではEnergyの概念はない。Energyなしでは物質の存在はない。

Energyは常に動いて止まない、絶えず収斂し、絶えず発散している。

Energyの発散は即ち創造であり、広義の文学でもある。宇宙全体は一部の偉大な詩篇だ。未完成の、常に創造しつつある偉大な詩篇だ。

Energyの発散は物としては声、光、電気、熱のようなもので、人間としては感情、衝

動、思想、意識のようなものだ。感情、衝動、思想、意識の純真な表現は即ち狭義の生命の文学だ。

生命の文学は個性の文学だ。なぜなら生命は完全に自主的、かつ自律的なものだからだ。

生命の文学は普遍的な文学だ。なぜなら生命はみな同じで普遍的なものだからだ。

生命の文学は不朽の文学だ。なぜなら Energy は永久不滅だからだ。

生命の文学は必ず真、善、美の文学だ：完全に自主自律の必然的な表現だから真であり、いつまでも人類の Energy の源となるから善であり、そしてみずから光を放ち、感激、温かみのあるシムフオニーだから美である。真、善、美は生命の文学の不可欠な二次的性格だ。

真ならず、善ならず、そして美ならぬ文学は Energy の無駄使いにすぎず、人生の大きな罪悪である。すべての罪悪は Energy の無駄使いにすぎない。

生命の文学を創造するにはまず人間を創らねばならない。まずより多くの Energy を蓄えて個人の精神作用の増長を促進せねばならない。

生命の文学を創造する人は一切の虚偽、ためらい、もくろみ、因襲を破らねばならない。完全に純真、率直、淡白、自主的でなければならない。まるで偉大な赤ん坊のように。

生命の文学を創造する人は楽観的でなければならない。すべて己に逆らう境遇は Energy を蓄えるチャンスだ。Energy が十分であればあるほど精神は健全であり、文学も生命力をもち、より一層真、善、美となる。

すべての芸術はかくの如し。すべての創作もかくの如し。

(初出 1920.2.23 上海『時事新報・学燈』)

僕の散文詩

解題：

この作品は 1920 年 12 月 20 日付けの上海『時事新報』に発表されてから、今日に至るまで郭沫若のどの作品集にも収められていない。もちろん和訳もはじめてである。散文詩といっても、自然風景の描写は写実である。「冬」では、二年前(1918)に岡山からやってきた時に比べると、千代の松原の北西方面(箱崎、松原、貝塚一帯の海岸)は松食い虫が大発生したせいで急速に枯れてしまった様子も、時報を告げる砲声もリアルに描かれている。面白いのは黒のマントを羽織った大学生が枯れた松林の中で「死骸」を集める行為

だが、おそらく貧乏で石炭が買えない彼には林の中で枯れ枝を拾った実際の生活体験によるものであろう。そして、枯れ萎んだ松林と強い生命力を見せた枇杷の木とザボンの木の見事なコントラストは異文化の中を生きる彼の目に映った周りの人間関係を暗示しているに違いない。「彼女と彼」「女の死体」「大地の叫び」の三篇は身辺小説の散文詩版と言えよう。二人の子どもを抱えた家族四人の苦しい生活を背景に家庭の束縛を逃れて、自由に羽を展ばしたい作者の深層心理の一端を窺い知ることができる。

一方、この「僕の散文詩」は彼が福岡滞在時に書かれ、そして発表した唯一の散文詩でもある。同じ1920年5月に出版された書簡集『三葉集』（「致宗白華」1920.2.16）の中で、彼は散文詩について次のように自分の見解を語ったことがある。

「詩のこころは抒情にある。抒情的な内容なら詩の形がなくても詩である。例えば近代の自由詩と散文詩はみな抒情的な散文だ。自由詩や散文詩はまさに一切の束縛を受けたくない近代の詩人たちがあらゆる固有の形式を打破し、専ら詩の真髄を自然に滲み出るために作り出したものである。その中には自然の音楽美の調和があり、絵画美の趣が存在する。」

実を言うと、郭沫若のこの発言は当時中国国内の詩壇の現状に対する不満であった。1919年後半から翌年の前半までの間、伝統詩の詩形の束縛から自らを解放したい中国の新詩壇では散文詩が一時的に氾濫していた。周作人の「小河」のような画期的な散文詩もあるが、実験という試行錯誤の段階にあるとはいえ、どう見てもただの散文にすぎず、決して詩とはいえないものは大量に作られていた。そのために詩とは何か、そして散文詩とは何かということを経験して郭沫若は真剣に考え、そしてその考えを世間に公表し、尚且つ自ら散文詩を書いて見せたのである。

「僕の散文詩」という作品が発表される前後の数年間の間、彼がまったく散文詩を書かないというのは、この作品が散文詩のあり方に関する彼の考えをより明らかにするためにわざわざ提示した作品の手本であるということをも物語っている。郭沫若の散文詩観を裏付ける唯一の作品として再認識し、再評価する必要があると思われる。

(本文)

冬

広い青々とした松原もこんなに枯れ萎んだのだ！

僕はまるで広い海の真中に佇んでいるようだ。周りに哀れみを乞うような数えきれぬ乞食の食欲の手。彼らはぼろぼろの蓑を身に着け、髪の毛が座布団のように編み畳まれている。

ここには枇杷の木が二本、そしてザボンの木が一本ある。一応のオアシスだ！彼らは同調しないこれらの異種族の中に生きて些か寂しさを感じるが、物寂しい環境の中で却って生き生きとして愛らしく見られる。枇杷の若葉たちはまるで翡翠のようで、一枚一枚極めて鮮やかだ。ザボンの木の枝にはすでに黄金色の実を付けている。

大きな黒のマントを羽織った人がこの枯れた林の中を急ぐ。彼は時々死人のような顔で空を見上げる。空も死人のような顔をしている。

彼は大きな網かごを提げて死骸を集めながら道を急ぎ、ある大きな墓場に向かっている。

僕は墓碑の前に立ち、「ドン」という昼の砲声を聞いた。

彼女と彼

どんよりと暗い海。

彼女は彼と海岸に坐って会話を交わしている。

「あたしはゆうべ夢を見た。三人の女が鉤型の崖をのぼっている。前には一人、後ろには一人、真中の方が息子をおんぶしているあたし。あたしたちは一本の古い縄で攀じ登った。前にいる人は頂上に辿り着いたが、縄が今にも切れそうなので、あたしはびくびくしながらやっとのぼりつめた。そして目が覚めた。後ろの人はどうなったかしら気になってしょうがない。」

「それは絶妙な象徴詩の材料ではないか！……」

「詩なんて！死んだほうがましだわ。幻影の中に身を潜めてうめくことしかできないあなたは卑怯だわ。」

「お前たち女は一生ただパンを食うことしか分らないのか。」

「そういうなら、あたし明日から断食するわ！」

彼女は結局彼を理解することができなかった。

女の死体

ぼくは病理解剖室で大理石の解剖台の上に横たわっている死体を見た。

ぼくはその黒光りを放つ辮髪を見てびっくりした。中国人かと思ったが、若い娘だと後で分かった。

彼女は全身蠟人形のように、また玉で彫刻された眠れる女神のオブジェのようだ。

赤みがまだ褪め切れない彼女の両頬はまるで霜がかかった茉莉の花びらのようだ。

萎んだ薔薇色の唇の中から鮮やかな光を放つザクロの実が見える。僕は解剖者が彼女の胸にメスを入れるのを見た。彼女は涙一滴も無い。彼女のために涙を流す人もいない。生きている間の彼女が誰かに愛されていたかどうか僕には知らないし、彼女が誰かを愛していたかどうか知る由もない。

彼女はひたすら両目を閉じたままだ。

彼女が今見ているのはきっともっと広くて、もっと自由で、もっと明るくて美しい世界だ！

大地の叫び

この頃毎晩毎晩地の底から号泣が聞こえてくる。

「辛いよ！苦しいよ！オレはお前らのようなたいした野心のない餓鬼どもに蹂躪されている。オレはもうこれ以上は耐えられない。オレの同類の中から第二の陳涉や呉広が現れてこないことをオレは信じない！」

このような号泣は毎晩毎晩聞こえる。そして泣き声もますます大きくなり、高くなる。

おかげで僕はますます眠れないのだ。

ああ、怖い、怖い、怖い！……

(初出 1920.12.20 上海『時事新報・学燈』)

二組の少年少女

解題：

『女神』創作期に書かれた新詩には、この「二組の少年少女」ともう一つの未収録詩「鶏を葬る」ほど叙事的なものは他にない。『女神』全体の趣とは調和がとれない異質な作品として見るしかない。一言で言えば、内容と表現手法は散文にしか相応しくないのに、無理やりに詩という体裁に押し込んだという中途半端な感じの作品である。東京と岡山で二度遭遇した少年少女の態度の変化を取り上げる作品だが、結局なぜ少年少女の態度が豹変したのか明言しないばかりか、ヒントも読者に与えてくれないまま作品を終わらせた。郭沫若の新詩の失敗作というべきかもしれない。しかし、わたくしはこの詩を読む時、作者の心の奥底にある重大な変化に気付いた。このことについて郭沫若本人は 1923 年 8 月に書かれた身边小説『月食』の中で多少触れている。

当時故郷の樂山にある両親に宛てた手紙および初期の身边小説などを見ると、一高特設予科時代から日本という島国の異文化の中で受けたカルチャー・ショックは少なくなかった。しかし、一高特設予科にいるのは全員中国人国費留学生で、下宿も四川の同郷と相部屋だった。意外に見落とされやすいことだが、一高在学の一年間彼は日本という社会にいるが日本人との付き合いがほとんどなかった。この詩の最初に登場した東京の少年少女に対する好印象も街で見た詰襟の学生服姿の人に対する当時の日本人のごく一般的な敬意と礼儀だと判断すべきだろう。郭沫若が人一倍人間の心の暖かさを感じたのは彼が異郷にいるからにちがいない。ところが、岡山六高に進学した後、彼を取り巻く環境が大きく変わった。とくに愛する日本人女性——佐藤をとみを東京から迎えて同棲するという彼の人生の「大事件」をきっかけに、彼は日本人と近所付き合いをせざるをえなくなった。『月食』によると、最初は東京から妹が来ると言ったので隣近所の人々に親切にしてもらった。しかし半年も経たないうちにをとみさんの妊娠で嘘がついにばれてしまった。それで周りの目つきが一変した。当時日本人妻がいる留学生に罰を与えるいわゆる「誅漢姦（売国奴を殺す）」の風潮が全国の留学生の間で蔓延していた。元の留学生だけの集団生活に戻ることが出来そうにない彼は極めて孤立した環境の中でこのような白眼視を六高卒業するまで我慢していたのである。これは彼が人間関係において日本で受けた最初の、しかも永遠に忘れられない精神的な大打撃と言えよう。このことは郭沫若の日本人観に大きな変化をもたらした。おそらく最初の敵意が芽生えたのもこの時期ではないだろうか。

(本文)

(一)

五年前ぼくは日本の東京に住んでいた。

街の裏通りへ散歩しに行った。

夜は明けたばかり、
 家という家は玄関が閉じたままだ。
 街で楽しく遊んでいた
 少年と少女に出会った。
 彼らの側を通る時、
 二人は「お兄ちゃん」と呼んでくれた。
 ぼくは振り向き、彼らの手をとって、
 一緒に遊んだ。
 ぼくたちはまるで兄弟三人のようだった——
 五年も経った今でも、
 「お兄ちゃん」という彼らの声が
 いまだにぼくの耳に響く！

(二)

三年前ぼくは日本の岡山に住んでいた。
 後楽園を通る時だった。
 授業を受けに東に向かっていた時、
 向こうから大勢の子供たちが
 登校するためにやってきた。
 ぼくはまた道で二人の少年少女に出会った。
 少年は帽子を取って一礼をしてくれた。
 ぼくも慌てて帽子を取って一礼を返した。
 「誰がお前なんかに敬礼するか！」と
 彼は眼を剥いてぼくに怒鳴りつけた。
 ぼくは慌てて「兄弟、ごめんね」と謝った。
 「誰がお前なんかの兄弟だ！」
 と彼はまた怒鳴った——
 今から三年前のことだったが、
 あの針のような眼差しは
 いまだに僕の脳髄に刺さっている！

(初出 1919.10.18 上海『時事新報・学燈』)

夜明け

解題：

『女神』には「女神の復活」「湘累」「棠棣の花」という三編の戯曲が収められている。巻頭に飾ったとはいえ、1920年10月から翌年の正月までの間に書かれたものだから、いずれも第一次詩歌創作欲襲来のピークが過ぎた後の作品にあたる。そもそも郭沫若はゲーテの『ファウスト』を読んで戯曲の創作を試みたのだが、その一作目が「地平線に立って叫ぶ」「天の狗」「鳳凰涅槃」などの力作とほぼ同時期に書かれ、そして1919年11月14

日の上海『時事新報・学燈』に掲載された「夜明け」であった。郭沫若の新詩には最初から自由詩と詩劇という二つの創作軌道が見られる。その詩劇は徐々に戯曲に傾き、そして最終的に歴史劇に定着していった。ここで紹介する「夜明け」はその詩劇の第一作である。いままでどの詩文集にも収められたことはない。和訳ももちろん今回ははじめてである。

(本文)

暗闇の中。しけた海の波濤のぶつかりあう音。

舞台裏に微かな夜明けの光が差してくる。朦朧として凄く不気味な海の色。波は依然として荒れている。大海原の中にはぼつんとした孤島が浮かんでいるように見える。

旭の光が徐々に増ってきて、海も次第に青くなっていく。島の影は次第に浮き彫りになり、鷗は乱舞する。

太陽が海を出る。空が火に焼けたように万丈の光芒が一斉に空を刺す。波は凧ぎ、広々とした海は赤ワイン色に変わる。島全体は太古の森林に覆われ、その上に太陽の光が照らし始めた。

岸边にはカラス貝が無数。太陽の光が島に注ぐと、カラス貝の中には大きなのが二つ徐々に開いて、中から二人の少年少女が飛び出してきた。

少女：お兄ちゃん、目がさめたの？

少年：うん。お前もか？

少女：お兄ちゃん、ほら、夜が明けたよ。

少年：うん。しけも止んだよ。

少女：踊ろうか。

少年：歌おうか。

(二人手を携えて歌いながら踊りだす。)

合唱：夜が明けました。

しけも止みました。

わたしたちは目が覚めました。

わたしたちは解放されました。

少女：お兄ちゃんは殻を脱ぎ捨てた蟬のようで、

少年：お前は籠を飛び出した鳥のようだ。

少女：お兄ちゃんは生まれたばかりの雄の羊のようで、

少年：お前は芽が出たばかりの春草のようだ。

少女：お兄ちゃんは噴火した火山のようで、

少年：お前は太陽に照らされた氷島のようだ。

少女：お兄ちゃんは夜明けの太陽のようで、

少年：お前は夜明けの海のようだ。

少女：あたしはいくらか埃や汚れを洗い落としたい。

少年：ぼくはいくらか輝かしい光を創りたい。

少女：氷島は融けて水となり、

少年：新しい大海原を創り出す。

少女：火山が噴出したのは

少年：赤裸々の島国だ。

少女：あたしは青い草、

少年：その新しい衣裳となれ。

少女：お兄ちゃんは雄の羊、

少年：お前の草原に生まれたい。

少女：あたしは空を飛ぶ鳥、

少年：声高らかに歌え。

少女：お兄ちゃんは蟬、

少年：ぼくも思い切って歌おう。

合唱：わたしたちは思い切って歌いましょう。

わたしたちは思い切って歌いましょう。

わたしたちはエバとアダムです。

わたしたちはエバとアダムです。

楽園は元に戻りました。

楽園は元に戻りました。

ああ、うれしい！

ああ、うれしい！

わたしたちは早く目覚めました！

(二人は手を放し、他のカラス貝たちを見ている。)

少女：ああ、彼女たちはみなわたしたちの姉妹だ。

少年：ああ、彼らはみなぼくたちの兄弟だ。

少女：わたしたちの兄弟は、

少年：まだ牢屋に閉じ込められている。

少女：わたしたちの姉妹は、

少年：まだ幽宮に身を隠している。

少女：わたしたちの姉妹よ！

少年：ぼくたちの兄弟よ！

少女：早く幽宮を出よう！

少年：早く牢屋を脱出しよう！

少女：早くわたしたちと一緒に春風と戯れ、

少年：早くぼくたちと一緒に春の風に向かって歌おう！

合唱：夜が明けました。

楽園は元に戻りました。

わたしたちの兄弟姉妹よ！

君たちは目を覚ましていいぞ！

(カラス貝たちは一斉に開き、無数の少年少女が同時に飛び出してきた。)

合唱：わたしたちは目が覚めました。

わたしたちはやってきました。

わたしたちは天地の新生を祝い、

わたしたちは新しい太陽の誕生を祝いましょう。
 お兄さん、早く目が覚めましたね。
 お姉さん、早く目が覚めましたね。
 一緒に踊りましょう。
 一緒に歌いましょう。
 (先覚者の少年少女は目覚めたばかりの仲間たちに輪になって歌いながら踊るよう指示した。)

合唱：踊りましょう。

天地も一緒に踊ってくれます。

歌いましょう。

海の太陽も一緒に歌ってくれます。

ああ、うれしい。

楽園は元に戻りました。

ああ、うれしい。

わたしたちは早く目が覚めました。

ねえ、みんな！

ねえ、みんな！

わたしたちは楽園にいるエンジェルです！

わたしたちは楽園にいるエンジェルです！

(踊りが終わり、先覚者の少年は仲間の少年たちを海辺に連れて行き、そして跪いて太陽に向かって拝み、先覚者の少女は仲間の少女たちを海辺に連れて行き、そして跪いて太陽に向かって拝み始める。)

(少年少女たちは分かれて合唱する。)

少年たち： 空の太陽よ、
 空の太陽よ！

あなたの輝かしい光に感謝する。

あなたの輝かしい光に感謝する。

永遠にその金の矢を放ち続けて、

天狼星たちを射尽くそう！

天狼星たちを射尽くそう！

少女たち： 果てし無い大海原よ、
 果てし無い大海原よ！

あなたの波のどよめきに感謝する。

あなたの波のどよめきに感謝する。

あなたの波の音は、

わたしたちに夢から目を覚ましてくれた。

わたしたちに夢から目を覚ましてくれた。

(少年少女たちは森に向かって跪いて祈りをささげる。)

合唱：太古の森よ！

太古の森よ！

わたしたちはあなたの胸に身を置き、
 わたしたちはあなたの胸に身を置きたい。
 またわたしたちを騙す蛇たちを
 生み出さないでおくれ！

(少年少女たちは跪き、向かい合って祈祷する)

合唱：わたしたちの肉体？

わたしたちの肉体？

どうかわたしたちの魂を守っておくれ！

どうかわたしたちの魂を守っておくれ！

再び災難が訪れないために、

再び災難が訪れないために、

楽園にある禁断の果実を口にしないでおくれ！

(少年少女たちは岸辺の貝殻を拾う。)

合唱：これらの牢屋、

これらの幽宮、

わたしたちを何千年も閉じ込め、

わたしたちを何万回も縛られました！

わたしたちは勝利の歌を歌いながら、

お前たちを葬りに来ました！

(一列に海岸線に立ち並び、同時に貝殻を海に投げ捨てる。)

さあ、牢屋よ！

さあ、幽宮よ！

お前とは、永遠に縁を切りました！

わたしたちは勝利の歌を歌いながら凱旋しました。

(先覚者の少年少女は仲間たちを連れて歌いながら森の中に入っていく。)

合唱：わたしたちは凱旋しました。

わたしたちは解放されました。

新たに天地と共に生まれ、

新しい海の太陽と共に創造されました！

ああ、うれしい！

楽園は元に戻りました。

ああ、うれしい！

わたしたちは早く目覚めました！

兄弟よ、

姉妹よ

わたしたちは楽園にいるエンジェルです。

わたしたちは楽園にいるエンジェルです！

わたしたちは万歳！

わたしたちは万歳！

わたしたちは万万歳！

(旭日が次第に昇り、海は群青色に変わる。静かな島には人の影もなく、鷗が乱舞するばかり。閉幕。)

(初出 1919.11.14 上海『時事新報・学燈』)

フンダリカ びやくれんげ
(白蓮華)

解題：

フンダリカというのはもともと梵語「pundarika」のことで、漢字は「分荼離迦」と書く。元々は地獄の東西南北の門外にあるという小地獄の一つを意味する。そしてその小地獄に白い蓮華の咲く池があるということで、白蓮華のことも指す。この詩は前書きに書かれたように、三星雲八彗星を発見した女性天文学者カロライン・ハーシェルを讃えるために書かれたものである。1920年の正月、田漢が東京からわざわざ郭沫若に会いに福岡にやってきた。意気投合する二人は一人はゲーテ、一人はシラーと自称していた。田漢の来訪で刺激を受けたせいか、その後郭沫若は幅広い読書を始めた。トーマス・カーライル(Thomas Carlyle)の“The Hero as Poet”を読んで「雪の朝」(『女神』収録)を書いたのと同じように、この「フンダリカ」も天文学者ハーシェル兄妹の伝記か何かを読んだあと触発されて書かれたのであろう。

郭沫若とカロライン・ハーシェルとの接点がないだろうと思われるが、この詩をよく読んでみると、白蓮華のイメージ、故郷在住時代と洋裁を習う時代のカロライン、そして作者自分の人生という三者が重なっていることが分かる。封建的な家庭に育った郭沫若にとって、自由へのあこがれが永遠なる命題である。故郷を捨てること自体が家父長の支配下を脱出することを意味する。まさに自由のためである。しかし、人生のすべてに直面しなければならない時、「自由はかならず勝ち取る！/生きるなら自分のことは自分で決める！」という堅い決意があっても、実際は「衣はまだ十分ならず/冠はまだつくれず/この微々たる躯体は何をもって雨風を避ける？」のように動揺して弱音を吐く時もあった。これは『女神』であまり見ないもう一つの郭沫若のウェットな人間像ではないだろうか。

(本文)

この詩は天王星の発見者ウィリアム・ハーシェル氏(William Herschel)の妹であるカロライン・ハーシェル(Caroline Herschel)を讃えるために書かれたものである。

カロラインは1750年3月16日プルス¹のハノーファー(Hannover)に生まれた。両親が保守的且つ頑固であるため、家政以外の教育は受けたことはなかった。17歳の時父親を亡くし、はじめて制帽など洋裁を習うことができた。習い事の合間には相変わらず母親の家政の手伝いをしていた。

兄のハーシェル²は早くからイギリスに渡り、音楽に頼って暮らしていた。その後パス(Path)市音楽長の職を得る。1772年の秋に帰省し、妹のカロラインを連れて再び渡英する。時にカロラインは22歳だった。渡英後、カロラインは兄のお手伝いをするので一時的に声楽家(vocalist)として名が知られていた。兄のハーシェルは音楽以外、占

星術にも長けている。当時望遠鏡はまだ発達しておらず、高価なわりに物はよくない。それで兄妹二人は自ら造ろうと志した。兄はレンズを磨き、妹は望遠鏡の胴体を造っていた。造っては壊し、また壊しては造っていた。不撓不屈で十年近く研鑽を積み重ねていた。兄は観測し、妹は計算する。二人は互いに頼りあっていた。兄が仕事をする際、妹は自ら食べ物を与えていた。彼らはついに 1781 年に成功した。その天王星を発見するなどの多大な功績で兄妹二人はその時から不朽の人物となったのである。

カロラインは外に三星雲八彗星を発見した。他にはブリテン天文誌補遺をした上に、兄のハーシェルが発見した 2500 個の星雲の縮図を製作した。1848 年 1 月 9 日生涯を終えた。

一、 故郷在住時代のカロライン

蓮の実は悲しくて切ない。
 蓮の実は悲しくて苦しい。
 なぜ切ない？
 なぜ苦しい？
 花托の束縛はきつすぎるから！

こころから自由に憧れ、
 こころから両親を愛する。
 両親は彼女に自由を与えない。
 ゆえに切なくて悲しくて苦しむ。
 ああ、蓮の実の両親よ！
 花托は水中に落ちていく。

二、 父を亡くした時代のカロライン

秋風が吹いてきた。
 蓮の茎が腐った。
 蓮の実は風と共に舞い上がり、
 こころの中はなお切なくて悲しい。

こころから自由に憧れ、
 こころから両親を愛する。
 両親はすでに枯れ落ちた。
 ゆえに切なくて悲しくて苦しむ。
 ああ、蓮の実の両親よ！

三、 洋裁を習う時代のカロライン

自由はかならず勝ち取る！

生きるなら自分のことは自分で決める！
 衣はまだ十分ならず、
 冠はまだつくれず、
 この微々たる躯体は何をもって雨風を避ける？

自ら黒い髪を繰り、
 自ら白い絹に織り上げる。
 自分の苦心を
 綺麗な新装に変える。
 ああ、なんと美しい容姿だろう！

四、 渡英後のカロライン

春の日はほのぼのと、
 南風は暖かい。
 さざなみは湖面いっぱい広がる。
 蓮は全身香りを放ち、
 悠々たる天国は風と共に顕われる。

天国の音楽は悠々と、
 天上の人は姿が見えない。
 蓮の花は扉を閉じて、
 水晶片を磨いている。
 レンズができるまで顔を見せない！

蓮の花は扉を開き、
 美しい顔に香りが立つ。
 ああ、衣いっぱいの真珠よ……
 いや、それは真珠なんかではない、
 それはゆうべ摘んだばかりの星屑！

(九・一・二九作)

(初出 1920.2.5 上海『時事新報・学燈』)

訳注

1. ウィリアム・ハーシェル [Frederick William Herschel (1738-1822)]、音楽家から転身し、天王星の発見や星雲・星団の観測など天文学分野での業績を上げたイギリスの天文学者。妹カロライン・ハーシェル [Caroline Lucretia Herschel (1750-1848)] 8 彗星を発見した女性天文学者の先駆けとしてよく知られている。
2. 原文は「其兄赫頓爾」となっている。妹 Caroline Herschel のことをカロラインと呼ぶなら、兄 William Herschel はウィリアムと呼ぶべきである。作者の不注意だろう。

3. ウィリアム・ハーシェルは 1781 年 3 月 12 日天王星を発見した。